
月は欠けていく

大橋 秀人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月は欠けていく

【Nコード】

N0013I

【作者名】

大橋 秀人

【あらすじ】

夫を失った事を受け入れられない妻。満月の夜、夫は妻の前に現われる。

(前書き)

この作品は、『月』をテーマに字数制限3000字で書かれています。

私の誕生日。それは全国的な晴れの特異日だ。お盆前の、太陽がじりじりと照り付ける、でも時折涼しい風が風鈴を鳴らす爽やかな季節。私は黙って夜を待つ。

月が満ちた頃、レイはやはり現れた。

一年前となんら変わらぬ風体で、気付けば夫は私の髪に鼻を埋めて
いる。

その分厚く優しい掌がお腹に置かれると、芯から暖められたように
全身が熱をもち、潤っていくのを感じる。

レイの唇は静かに、でも情熱的に乳房の膨らみをなぞっていく。私
は溜め息を漏らしながら、一年、心から待ち望んだこの瞬間に陶醉
していく。涙が流れる。

三年前の真夏の夜、私は布団を頭からかぶり、泣いていた。

その年の初めの、まだコートが手放せない季節。私はレイを失った。
説明に来た警察の話では、それは運が悪いとしか言いようのない事
故だったという。医者が言うには、レイは、「苦しまずにいった」
のだそうだ。

私は何日か続けてふらふらと事故現場へ足を運んだ。大げさに凹ん
だガードレールの端に、日本酒のワンカップに活けられた一輪花と、
湿気た線香の残骸が散らばっていた。

大切なものを失うことなど、実際、他愛ない。確かに私は、頭ではそ
のことを理解していた。でも実際に失ってみて、それをどう受け入
れればいいのか、私には見当もつかなかった。

部屋に戻ると涙が溢れる。私の中にレイを失った感覚はまったくな

かった。ただ、そこにレイがいてくれない淋しさが、体の奥底から涙を染み出させる。

レイを失って半年、私は枯渴しきっていた。大量の涙が流れた。それは嗚咽ではなく、ひどく静かなものだった。あとからあとからとめどなく染み出る涙だった。

泣き疲れて眠りの中にいた私の頬に心地よい熱を感じたのは、誕生日の未明、きっと誰しもが寝静まった頃だったと思う。その掌の大きさに、私はレイが来てくれたと直感した。それは私の頬をすっぽり覆うのにちょうどいい大きさなのだ。

でも私は怖くて目を開けられない。必死でレイの背中に爪を立てる。レイはそんな私の総毛立った肌をゆつくりと撫で、なだめてくれる。あれほど涙を流したのに、まだこんなに水分が残っていたのかというほど私は濡れ、レイを受け入れる準備が万端となる。

潤沢になった私の体に静かに分け入ると、彼は喉仏を上下させたあと、低いうめき声をあげた。

突き刺さる快感に、私は声を漏らすまいと必死にレイの首筋に吸い付く。

『ああ、この形』

そう思いながら、私は喉仏とあご筋の輪郭を舌でなぞり取る。私たちはきつく抱き合い、ゆつくりと揺れを起こす。

私もレイも早く腰を打ち付けたくてしかたなかったが、あえてゆつくりとしたストロークを貫く。レイがくれる一つの感触も逃すまいと、私は感覚を研ぎ澄ませていく。

当時、レイが一晩もどってきてくれたことで、私は不思議と元の生活を取り戻せた。

夫を亡くしておきながら喪失感を持たないまま、私は泣くのを止め、改めて生活を始める元気を取り戻したのである。

特に二年目の私の誕生日に再びレイが現れた時には、一年会えない淋しさを一夜だけでも会える喜びが凌駕した。いつかまた会えると思えるだけで、私のふやけた心は再び硬度を取り戻したのである。

誕生日。大勢の人が私を祝ってくれる。両親、妹、そしてその子供、友人も何人が駆けつけてくれた。ごちそうを用意して、皆、たくさんのプレゼントをくれる。全員、私の元気な姿を確かめたくて、一生懸命明るく振舞う。

そんな人たちが私は愛しくて、できるかぎりの微笑みを浮かべる。でも、そんな愛しい人たちの、私の微笑みを見て安心したように肩を下ろす様をみると、自分がどうしようもなくひとりぼっちなことに気付いてしまう。

祝われる側と祝う側。見守る側と見守られる側。わたしはみんなに監視されている心持になり、そんなときは決まって、パーティーのあの、静かな夜に想いを寄せる。

静かで、激しい、私が生きていく中でもっとも尊い夜に。

レイは決まって私の誕生日の夜　　月がその日一番輝いている頃に、現われる。

私はその登場と、とりわけ去っていくタイミングをつかもうと、寝ない覚悟でベッドに息を潜めている。

でもレイは、気付いた時にはそこにいて私を抱きしめていたりする。そして気付いた時には…。

レイの腰つきは徐々に激しさを増し、息づかいが私の耳に届く。私は負けじとレイに体を擦り付ける。突かれるたびに激しい快感が頭

をつき抜け、痙攣が体の内から起こり始まる。

「レイ、レイ」

私は無心でレイの名を連呼する。

そして言葉にならない叫びと共に、私の体をオーガズムが包みこんだ。

私の体は三年の月日を経て、簡単にオーガズムに達するように成熟していた。

三年前と何も変わらないことを望んでおきながら、時を経て、私の体は刻々と変化していた。

私の中での時間は、あの時から感覚的には止まっている。それは故意に、時間の止まってしまったレイと自分を合わせようとしているからなのかもしれない。

でも、本当に今でも心はあのときのままだと思う。とりわけレイが帰ってきた日には、三年の月日が無かったかのように自然に接することができる。

でも体は正直なもので、以前より確実に快感を味わえるものになっていた。

それは良くも悪くも変化というのにかわりなく、それはレイには有り得ないことだった。

気だるさが全身を覆い、まどろみの中で私は考える。レイは来年も来てくれるだろうか。来年も、再来年も、五年後、十年後も……。私の体は時と共に変化していく。若々しく瑞々しい未熟な肌から、どんなに丹念に手入れをしても、衰えを隠せないしなやかな肌に。皺も一本一本増えていくだろう。

このまま月夜が明けなければ良いのにと思う。

まどろみの誘惑に引きずり込まれそうになりながら、私は必死にレイの手を握る。

レイは私にびつたりと体を寄せ、穏やかな寝息を立てている。

そこには疑いようなない日常が横たわっている。

日常のそれ以上でも、以下でもない。

だから私は安心しきって、まどろみに手を引かれてしまう。

どうか朝になってもレイが隣にいてくれますように、と私は願う。

強くレイの手を握りしめながら。

(後書き)

感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0013i/>

月は欠けていく

2010年10月20日04時26分発行